



巻頭言：「大学図書館の機能と司書」

井藤久雄 1

所蔵資料の紹介

クールマンのウルトラ天秤

森本 稔 3

角倉邦彦先生と有機微量元素分析発祥の地～鳥取

穂積啓一郎 5

図書館に期待すること

清水拓郎 6

図書館紹介：南部町立図書館

角田有希子 7

ミニ・シリーズ情報検索コーナー

CiNii Books をご存じですか？

9

トピックス

10



巻頭言

「大学図書館の機能と司書」

井藤 久雄

我が国には 5000 を越える図書館が存在している。サービス対象別にみると学校図書館、大学図書館や地域の公共図書館は馴染み深い。国立図書館、自治体庁内図書室、議会図書室、入院患者を対象とした病院内図書館、刑務所図書館、船員図書館、自衛隊図書館など多種多様である。当然、利用者のニーズは多様で、提供されるサービスは質的に異なる。

団塊の世代である私自身、図書館には随分とお世話になった。小学生の頃、本を潤沢に所有する家庭は少なかった。小学校の図書室では担当係を決めて生徒が運営を手伝っていた。図書委員に選ばれることは一種の誇りでもあり、特権のように感じられた。委員に選ばれた時、「ヘレン・ケラー」、「ロビンソン・クルーソー」「ああ無情」や日本史の偉人伝などを放課後に読みあさった。今よりも読書時間は長かった、と思う。その時の読書による言語体験により日本語の語感が身に付いたように私には思われる。私にとって図書館は非日常的な存在だった。

学生時代はもっぱら試験の準備に利用した。本の存在が不思議と落ち着く空間を提供してくれた。ジャンルに限らず、もっと読書をしておくべきであったと多少、悔やんでいる。1974 年に大学を卒業してからは学術情報の収集、文献の検索は専ら図書館に頼った。週 1 回はインデックス・メディクスに眼を通した。情報通信技術 (ICT) が普及していない時代である。残念ながら、学術関係以外の一般図書からは益々、疎遠になった。

図書館の機能は情報や資料の収集、整理、保存、提供、広報活動、他の図書館との連携・協力そして図書館利用に関する指導 (ガイドランス) である。こ



れにより知的立国の基盤を支えている。加えて、図書館は一人ひとりの市民の自立を支えるための「知の拠点」として機能している。図書館は小宇宙であり、文化のバロメーター、と言われる所以である。大学図書館に限って言えば学生、教員それに事務職員に対し、就職情報、学習資料あるいは専門的ないし学術的情報収集の機能が提供されている。

かつて、図書館は「無料貸本屋」と揶揄されていた時代があった。その図書館の機能や役割が確実に変化している。2010 年はその節目の年だったように思われる。「国民読書年」であり、その拡がり是不十分であったが「電子書籍元年」とも言われた。加えて、鳥取県では図書館種の枠を越えて一つの図書館と見たてた一大図書館ネットワーク構想がスタートして 20 年目を迎えていた。このネットワークにより、全ての公共・学校・大学などの図書館資料の検索と相互貸し出しが可能となっている。鳥取大学附属図書館も例外ではない。

図書館をめぐる環境は刻々と変化している。多種多様な課題に挑んでいるが電子図書への対応は図書館の評価に大きな影響を与えることになる。実際、鳥取大学附属図書館におけ

る電子ジャーナルのアイテムは 11,410 種に及び、研究室から入手可能である。雑誌のバックナンバーを揃える必要もない。大学予算を圧迫しているが、研究者の利便性は格段に高まっている。

今、インターネットからあらゆる情報が得られる。携帯電話からも情報の入手が可能である。しかし、「質の保証」の観点からは十分ではない。実際にインターネットからの情報では、内容が浅く、内容の濃いレポートを作成するためには、元の情報を探り、文献に当たることが基本である。こうした情報をどう記録し、適切な情報を選択するか、意外と難しい。従来の紙・活字メディアと新しい電子書籍・情報（ウェブ）、この二つをいかに有機的に関連し、利用できるシステム、いわばハイブリッド図書館の構築が進められている。情報検索には電子書籍・情報が優位であろうが、言語力を育成するには紙に触れ、ページをめくり、書き込みのできる活字媒体の方が勝っているように思われる。活字文化は今後も保持すべきである。

図書館の業務運営、改革を担うのが司書・司書補である。具体的には図書館情報学の知識と技術を身に付け、図書館固有の業務を行う専門的職員であり、文部科学省が認定する国家資格である。学校司書が勤務している学校は小学校約 5 割、中学校約 6 割、高等学校約 8 割である。鳥取県では全国で初めて常勤司書が全ての県立高校に配置されている。これにより、生徒への貸し出し数が飛躍的に増加し、図書館が活性化されている。司書は図書館業務の遂行において極めて重要な役割を担っているのである。「司書資格を持った職員のいない図書館は、教員免許を持った教師のいない学校に等しい」（片山善博、前鳥取県知事）。

現在、公的図書館では指定管理者制度により業務外部委託が進められており、経営の効率化が計られている。議会や財政担当者の中で、図書館のミッションや司書の役割が理解されていないのである。こうした傾向は必ずしも好ましいものではない。図書館業務は専門性が高く、継続的な経験の蓄積が欠かせないが、業務の外部委託をすると司書の身分が不安定となる。司書は正規職員として育成すべきである。大学は知の創造（研究）と伝承（教育）の場である。だからこそ大学の神経（情報伝達と管理）である図書館と司書の重要性を強調したい。

現在、鳥取大学附属図書館には 13 人の専任常勤司書、6 人の非常勤司書、計 19 人が配置されている。大学の運営費交付金が削減されているが、司書数だけは確保されている。司書の役割はデジタルであれ、アナログであれ学生や教職員の知的関心や当面の問題点を解決する入り口まで導くことにつきる。困ったときの司書頼み、一度、声をかけてみることを学生諸君には勧めたい。使ってこそその図書館、活用してこそその司書である。アクティブ・ラーニングに図書館は欠かせない。

司書と教職員との連携を深め、学生の参加による図書館運営・企画や図書選定、鳥取大学研究成果リポジトリの充実などが、差し当たって本学図書館の課題と思われる。メディア系教職員とのさらなる連携も必須である。図書館は教育改革を先導する可能性を秘めていることを、大学関係者は改めて認識すべきである。

（いとう ひさお : 研究担当, 米子地区担当理事, 副学長）

所蔵資料の紹介



クールマンのウルトラ天秤 1920年代（大正期）
Wilh. H. F. Kuhlmann (HAMBRUG) Ultra Microbalance
Capacity (秤量) : 20 g, Sensitivity (感量) : 0.001 mg

オーストリアのGraz大学教授 Pregl（1923年ノーベル化学賞受賞）がドイツのPaul Bunge社技師Kulmannに依頼して製作した、当時としては最高精度の微量化学はかり。鳥取高等農業学校教授角倉邦彦先生が欧州留学中（1923-24年）、Preglより有機微量分析法の指導を受け、その技術とともに日本に持ち帰られたもので、製造番号（1843）も若く、型式も大変珍しい。日本における有機微量分析の歴史を語る上でも貴重なものである。

角倉（すみのくら）邦彦先生の天秤

森本 稔

「図書館の書庫に古い天秤があるが、価値があるものかどうかわからない」との情報が入ったのは、6月5日に鳥取で開催される「日本分析化学会有機微量分析研究懇談会」と「計測自動制御学会力学量計測部会」の「合同シンポジウム」の準備に追われていた時であった。早速見せてもらったところ、いわゆる棹の両側に皿がぶら下がった化学天秤が5台、ホコリをかぶった状態で置いてあった。銘板を見ると「ザルトリウス製」が4台、「クールマン製」が1台であった。ザ

ルトリウスは現在でも天秤はかりのトップメーカーとして知られているが、クールマンは筆者には初耳であった。偶然にも近く開催される合同シンポジウムは天秤はかりを専門とするシンポジウムであるため、そこに展示すれば何らかの情報が得られるものと期待し、早速図書館より借り出し、合同シンポジウムの会場である「とりぎん文化会館」へ慎重に運び出した。

古い天秤を並べたシンポジウムの展示会場ではベテランの先生や技術者の方々から「こ

のタイプの天秤を使っていた」などの声が聞かれ、分析に苦労した懐かしい思い出を語る場となった。また、シンポジウムに参加されていたザルトリウス社の方には社内の古い資料を探していただくことにもなった。そんな中、有機微量分析研究懇談会の長老で顧問の穂積啓一郎先生がクールマンの天秤をいろいろな方向から眺めておられた。そして、「これは角倉先生が使われていたものではないか?」、「いや、おそらく間違いないだろう」、「これは非常に貴重なものですよ」と言われた。恥ずかしながら筆者は角倉先生について何の知識も持ち合わせていなかった。「角倉先生は鳥取大学農学部の前身の鳥取農林専門学校の先生で、日本で最初に有機微量分析の本(微量分析叢書全4巻)を書かれた。つまり、鳥取大学は日本の有機微量分析の発祥の地ですよ」と教えていただいた。さらに、穂積先生は自分のカバンから角倉先生の著書のコピーを取り出され、見せていただいた。角倉先生ゆかりの鳥取でのシンポジウム開催とあって、わざわざ持って来られたとのこと。思いもよらない展開となり、急いで図書館に角倉先生の本を探していただくよう依頼したところ、第1~3巻を所蔵していることがわかった。しかし、第4巻は無かった(後に、研究室の火災で焼失していたことがわかった)。「角倉先生ゆかりの鳥取大学には全4巻を揃えておくべき」とのことで、後日、穂積先生より紛失していた巻のコピーを送っていただくこととなった。

穂積先生より送られたコピーと共に「鳥取でのシンポジウムで思いがけず角倉先生ゆかりの天秤を見ることができた」ことのお礼と「角倉先生は有機微量分析に多大な貢献をされたにもかかわらず、専門学会の有機微量分析研究懇談会の中でもそのことを知る人は少なくなっている。これを機会に角倉先生を顕彰していただきたい」との依頼が添えてあった。しかしながら、角倉先生は昭和24年に鳥取農林専門学校から鳥取大学農学部へ変わる

際に退官されており、その時の学生ですら80歳を越えるほどの時間が過ぎており、鳥取大学には私を含め角倉先生を知る人も、関係する資料もほとんど残っていなかった。そこで、穂積先生に顕彰文の執筆を依頼した。当初、「顕彰文は鳥取大学関係者が書くのが筋であり、私も角倉先生のことについて詳しく知っているわけではない」とのことで固辞されていたが、「角倉先生の有機微量分析に対する業績を評価できる人が鳥取大学にはいない」こと、「角倉先生に関する情報を調査し、提供する」ことで少々無理を言って引き受けていただいた。穂積先生との間で資料のやり取りを重ねて完成したのが「角倉邦彦先生と有機微量元素分析発祥の地~鳥取」である。その間、図書館には様々な角度から資料収集を手伝っていただいた。

穂積先生が書かれた顕彰文を読むと「これだけの業績を挙げられたのに、なぜ今の鳥取大学にそのことが伝わらなかったのか」が不思議であり、残念に思われる。また、角倉先生は鳥取農林専門学校最後の校長として鳥取大学農学部への編入を見届けて退官されたが、戦後の変革期の中、対立する意見の調整に相当苦勞されたようである。それ故、鳥取大学としても改めて角倉先生の業績を再評価し、顕彰していただければと思う。

今回、偶然(必然!?)見つかったクールマン天秤から日本の有機微量分析の功勞者である角倉先生の業績を再発見するに至った。さらに、今回のことがきっかけとなり有機微量分析研究懇談会として日本に現存するクールマン天秤の調査が始まった。平成24年8月現在、鳥取大学の他、東大、京大、阪大、理研、武田薬品など古くから有機微量分析を行っていた研究施設に11台が確認されており、いずれも貴重資料として展示室等に丁寧に保管されているようである。日本の有機微量分析の歴史を語る上でも貴重な角倉先生のクールマン天秤も鳥取大学において大切に展示・保管していただくことを希望する。

(もりもと みのる : 生命機能研究支援センター 准教授)

角倉邦彦先生と有機微量元素分析発祥の地～鳥取

穂積 啓一郎

角倉（すみのくら）邦彦先生は、明治 23 年（1890 年）6 月 19 日医師で愛光舎牧場創設者の賀道氏の二男として東京で生まれた。大正 4 年（1915 年）北海道帝国大学（当時は東北帝国大学）農科大学農芸化学科を卒業後、大正 10 年（1921 年）創立したばかりの鳥取高等農業学校（以下鳥取高農）農芸化学科教授として赴任し、蛋白質の研究に成果を挙げているが、大正 12 年（1923 年）より 2 年間在外研究員として欧米に留学した。たまたまドイツのミュンヘン国立化学研究所で有機微量元素分析を実施しているのを見聞し、この分析法の創案者であるオーストリアのグラーツ大学のプレーグル（F. Pregl）教授を訪ね、直接技術の研修を受けた。その頃まで物質の化学構造の解析はリービヒ（J. Liebig）らが開発したマクロ分析法が用いられていたが、一回の分析に数グラムの試料を燃焼分解するため、農芸化学、生化学、医学、薬学など微小成分を扱う分野での利用には困難が多かった。プレーグルの開発した微量分析法によると一回の分析に数ミリグラムの試料でよく、且つ分析に要する時間も著しく短縮された。プレーグル教授はこの業績により 1923 年ノーベル化学賞を受賞した。

角倉教授は有機微量元素分析法をいち早く我が国に導入すべくクルマン（Wilh. H. F. Kuhlmann）の微量化学はかり（天秤）、炭素-水素および窒素分析装置の一式を購入し、鳥取高農の研究室に設置して学生の実験にも供した。さらに、この新技術を全国に普及させるべく昭和 3 年（1928 年）より「微量分析叢書」全 4 巻を発刊した。これは有機微量元素分析法の我が国最初の指導書である。この著書により海外の微量分析技術の状況が明らかとなり、同時に全国の大学、企業でも積極的に微量元素分析室を設置する機運がもたらされた。しかし、間もなく日本は戦時体制となり、太平洋戦争に巻き込まれ、微量分

析の進歩は停滞を余儀なくされた。昭和 19 年（1944 年）より角倉教授は校長をつとめていたが、戦後に吹き荒れた大学紛争にも責任者として苦節を経験し、昭和 24 年（1949 年）鳥取農林専門学校



角倉邦彦教授

（鳥取高農より改称）が鳥取大学農学部に入られるのを見届け、退官された。東京に戻られた後も共立女子大学、山脇学園短期大学で教鞭をふるわれたが、昭和 56 年（1981 年）12 月 19 日逝去された。享年 91。

角倉教授がもたらした有機微量元素分析技術はその後全国に広がり、本来手先の器用な日本人の特性にも合致して、さらなる新しい分析法を生み出した。昭和 28 年（1953 年）には微量分析技術者や研究者が新情報を交換する場として元素分析懇談会（現日本分析化学会有機微量元素分析研究懇談会）を結成し、第 1 回シンポジウムを開催した。以来今日まで全国に会場を移してこのシンポジウムが続けられ、平成 24 年（2012 年）6 月には角倉教授ゆかりの地である鳥取において第 79 回のシンポジウムが盛大に開催された。

角倉教授は日本最初の大学スキー部である北大スキー部の創立メンバーであり、キャプテンも経験した。鳥取高農着任早々の大正 10 年（1921 年）暮れには学生を引き連れて滑り始め、その後スキー部を作り、学校近くの稲葉山や鳥取砂丘西側の浜坂砂丘、時には大山や氷ノ山で練習に励んだ。当時はまだ一本ストックのスキースタイルであったが、間もなく二本ストックとなり、市民にも広がった。鳥取高農スキー部は昭和 4 年（1929 年）の西日本スキー大会で優勝を果たし、昭和 5 年

(1930年)には鳥取県スキー連盟が結成され、角倉教授が会長に就任した。

角倉教授の先祖は宇治川の合戦(寿永3年、1184年)で名を馳せた近江源氏の佐々木一族である。室町期には幕府御用医師をつとめたが、京都嵐山で土倉業や酒屋を経営したことより角倉と呼ばれるようになった。桃山期には角倉了以が朱印船の鑑札をうけ、東南アジア貿易で富を蓄積したが、慶長11年(1606年)丹波から京都に流れる保津川の掘削を願い出て、自費で岩を砕き、流路をさらえ、舟の流通を可能にした。これによって丹波と京都の物資流通は倍増したといわれる。工事の犠牲になった作業員を弔うため保津川を見下ろす急坂に千光院を建て、自身の作業姿を彫像に残している。また、慶長16年(1611年)高瀬川を開削し、伏見の十石舟を京都まで連絡したのも了以と長男素庵で、幕末には坂本竜馬や新撰組など歴史にその舞台を提供している。

角倉教授の二女文子氏は慶應義塾大学教授千住鎮雄氏に嫁ぎ、エッセイスト、教育評論



一本ストックの初期のスキースタイルで滑る角倉邦彦教授(大正末期の鳥取砂丘にて)

家として優れた著書がある。孫の千住博氏は日本画家、千住明氏は作曲家、千住真理子氏はヴァイオリニストでいずれも当代知名の文化人として活躍している。

中世に角倉了以が残した壮大な開拓事業の血脈は角倉教授に受け継がれ、有機微量元素分析という新技術を鳥取の地で開花させた。その余澤を継承するわれわれは角倉教授の開拓精神に深く敬意を表すると共に、その業績を顕彰するものである。

平成24年(2012年)8月吉日

(ほずみ けいいちろう：日本分析化学会
有機微量分析研究懇談会顧問 京都薬科大学名誉教授)

図書館に期待すること

清水拓郎

私は、図書館は基本的にはこれからも利用者の期待に応え続けて欲しいです。利用者には教職員、学生および学外者が含まれます。そして、それぞれの利用者は、利用者属性ごとに大まかな特徴があるかと思いますが、図書館を異なる目的で利用し、図書館に対して異なる期待をしていると考えられます。それら異なる期待を適切な手段を用いて図書館がしっかりと把握することで、図書館のあるべき姿およびその姿と現状の姿との距離がかな

り見えてくると考えます。私は、現実的には困難も少なくないと思いますが、その距離を少しずつでも縮めていくことが重要であると考えます。利用者の期待を把握することなく図書館を変化させていくことは、その期待に応えるには効果的であるとは言えないからです。しかし、だからといって図書館は何も考えずに利用者の期待に応え続けてさえいれば、それで全て良いという訳でもないと考えます。それだけでは、図書館が利用者にとって、た

だの居心地の良い場所になってしまう恐れがあるからです。そうなることを防止するために、利用者が習得していない「図書館学」についての専門知識をもつ図書館職員および司書の方に、急速な社会の変化とシンクロして利用者の期待の変化幅はより大きくなっていくことが予想され困惑されることもあるかと思いますが、これからも利用者の期待に応え

続けるための仕事をする人と並行しながら、私を含め利用者には見えていないあるべき図書館の実現を目指すために必要なより深い視点から取り組まなければならない仕事をもして頂ければと願っています。

(しみず たくろう 農学部獣医学科 6年)

シリーズ鳥取県内の図書館 第6回 南部町立図書館

「暮らしによりそう図書館として」

南部町立図書館館長 角田有希子

1 南部町立図書館の概要

南部町には2つの図書館があります。「法勝寺図書館」は1990年に開館した2階建て延床面積483㎡の単独施設です。蔵書数は47,741冊(平成23年度末現在)、小さな図書館の棚はすでに満杯の状態です。すぐ近くには、小学校があり、夕方になると学校帰りの小学生たちが、思い思いの本を読んだり、宿題をしたりしています。



「天萬図書館」は、平成23年に天萬庁舎(旧町役場庁舎)の1階に開館しました。延床面積534㎡で、約50,000冊の蔵書が可能です。木のぬくもりがある、明るい図書館で、工夫をこらしたコーナー展示がいたるところにあり、本の魅力を発信しています。それぞれの図書館は4名の職員体制で、そのうちの6名

が司書資格を有しています。



平成23年度の個人貸出冊数は、法勝寺図書館60,286冊、天萬図書館46,749冊、あわせて107,035冊でした。23年度は、初めて貸出冊数が10万冊台となりました。年齢別の利用者数は、小学生が3割を占めています。中学を卒業すると、皆、町外の高校に通学するので、10代、20代の利用はとても少ないのが、1つの課題です。ただ、23年度は、20歳代の利用者数が前年度にくらべて、倍増しました。これは、天萬図書館が開館したことと、定例のおはなし会を実施することができ、多くの若いお父さん、お母さんたちの利用が増えたことが理由の1つだと考えています。

2 南部町立図書館の取り組み

～暮らしに役立つ図書館～

南部町立図書館は、小さな町の図書館であっても、『暮らしの課題を解決するお手伝いがしたい!』と考えています。暮らしの情報コーナーとして、ハローワークや新聞折込などの就職情報やセミナーなどのチラシ、パンフレットを置き、同じコーナーに仕事に関する本も置いています。

また、「闘病記文庫」を設置し、分類上別々の棚にあった闘病記を1つの棚に病名別にまとめました。鳥取県立図書館の闘病記文庫のリストを一緒においたり、病気について調べることができるように医学関連本も近くに置いています。

どちらも棚1つ、あるいは2つの小さなコーナーです。しかし図書館は、その館だけで仕事をしているわけではありません。図書館のネットワークという大きな情報が流れる水脈の蛇口＝「棚・コーナー」を、身近な図書館につけることが大切だと思います。図書館にはその水脈を辿り、情報を手渡せる司書がいるのですから。



天萬図書館闘病記文庫

また、今年度からは、研修会や講座に本を持って出かける出前図書館や図書館内のスペースを展示に利用してもらうミニギャラリーなどの取り組みも始めました。

～子どもたちへの支援～

南部町は、平成17年10月に「南部町子どもの読書活動推進計画」を策定しました。そして、平成18年4月には、この計画を推進していくための組織として、町内の子どもに関わりのある機関や団体が集結し“南部町子どもの読書活動推進委員会”が立ち上がりました。委員会では、毎年、子どもと本をつなぐきっかけづくりとして“南部町読書まつり”を開催しています。

また、町内の5校（小学校3校、中学校2校）には、すべて学校図書館司書（町費）が配置され、公共図書館と5校すべての学校図書館がネットワークでつながっています。児童・生徒のリクエストはもちろん、調べ学習に必要な本も、システム上でそれぞれの内容にそった“テーマ”を入れれば、公共図書館でそのテーマに沿った本を集めて学校へ配本することができます。

3 鳥取大学医学図書館との連携

2007年2月に相互協力の協定が取り交わされ、団体貸出が始まりました。50冊という少ない冊数ですが、学生のみなさんに利用していただけるのは、非常にうれしいことです。また、町立図書館の予算規模では、なかなか医学の専門書をそろえることはできません。医学図書館の豊富な蔵書は、小さな町の図書館にとって心強いものとなっています。

また、連携講座として、科学あそび講座を2010年と今年度共催させていただきました。発見と驚きがたくさんつまった講座となり、多くの親子に参加をしていただくことができました。

今後も、ぜひ、このような講座を続けていきたいと思っています。

4 暮らしによりそう図書館へ

小さな町の小さな図書館でも、できる図書館サービスはできるだけやりたいと思っています。もちろん図書館だけで解決しようとしても限界がありますし、図書館だけでなく

てもいいと思っています。小さな町だからこそ、図書館以外の部局の人や地域の人の顔がよく見えます。人とつながること、これも図書館にとって大きな力だと思っています。人と人のネットワークを広げることのできる

ことは確実にあると思います。人とのつながりを大切にしながら、町の図書館として、町の人たちの暮らしによりそう図書館になるための取り組みをこれからもしていきたいと思っています。

ミニ・シリーズ情報検索コーナー

CiNii Books をご存じですか？

—NACSIS Webcat の終了—

図書館情報課学術情報担当 津村 光洋

すでにお気付きの方も多いかと思いますが、国内の学術雑誌の論文情報提供サービス CiNii (サイニィ) が昨年 11 月よりリニューアルされています。

従来からの変更点は、これまでの国内学術論文の論文情報サービスが CiNii Articles として存続する一方で、新たに全国の大学図書館が所蔵する本・雑誌の情報を検索できる CiNii Books の機能が加えられました。これら二つの画面左上の「日本の論文をさがす / 大学図書館の本をさがす」で簡単に切り替えられ、論文の検索と、本や雑誌の検索を同じ CiNii 上で行うことができるようになりました。なお、提供元の NII (国立情報学研究所) は CiNii Books を、全国の大学図書館の総合目録である NACSIS Webcat (以下 Webcat) の後継として位置付けているため、Webcat は 2013 年 3 月をもってサービス終了の予定です。

Webcat というと、学部生の皆さんは、講習会などで紹介している Webcat Plus を思い浮かべられるかもしれません。Webcat Plus は Webcat の機能を拡張し、全国の大学図書館の資料に加えて国立国会図書館・書店・古書店等のデータをまとめて検索できるデータベースです。また、Webcat Plus の連想検索機能は幅広い検索により、調べたいテーマがまだ漠然としているとき効果を発揮します。しかし、特定の資料を探したいときには検索結果のノイズが多すぎたり、雑誌の検索にはあまり向いていないといった欠点があり、研究者や上級の利用者の方にとってはシンプルな Webcat のほうが使いやすかったかもしれません。

さて、新しい CiNii Books では、全国の大学図書館の資料の情報、どこの大学にあるかという所在情報に加えて、各図書館の OPAC へのリンク、同じ著者の資料へのリンク機能などが利用できます。一部、本の表紙のイメージも表示されるようになりました。画面はシンプルですが機能は充実しており、学部生から研究者の方まで安心してお勧めすることができます。今後は、本や雑誌を検索する際のもっともスタンダードなデータベースになってゆくと考えられますので、講習会等でも積極的にご紹介していきたいと考えています。

ご不明な点、ご要望等ございましたら図書館情報課学術情報担当までお知らせください。

Tel:0857-31-5673 (内線 7060) E-mail:ac-gakuju@adm.tottori-u.ac.jp

トピックス

平成24年度第1回 鳥取地区図書館実務者連絡会議を開催

鳥取地区図書館実務者連絡会議を、7月25日に鳥取大学附属図書館で開催しました。県内東部の大学図書館と公共図書館から実務担当者11名が参加し行いました。各館の活動状況報告に続き、今年度の職員相互派遣研修、地域貢献事業などについて協議を行いました。地域貢献事業では、「鳥取県内図書館のお宝発掘事業—我が図書館自慢の資料展3—」として、展示会を12月1日（土）～12月13日（木）に鳥取大学広報センター、15日（土）～24日（月）倉吉市立図書館で行うことの報告があり、各図書館の参加をお願いしました。

湖東中学生の職場体験を実施しました。

中学生職場体験学習を3年ぶりに行いました。中央図書館の耐震改修工事により中断していましたが、6月23日から27日の5日間、鳥取市立湖東中学校の2年生3名がワクワク湖東の体験学習を行いました。

生徒たちは、カウンターでの図書の貸出・返却処理をはじめ、文献複写やNACSIS-CATから書誌データをダウンロードするなどの業務を体験した。生徒は少しおとなしかったですが、「図書館の仕事は思っていた以上に体力を使う仕事だった。」「コンピュータを使う仕事が多かった」などと感想を述べていました。



体験学習を行う生徒たち

学生選書ワーキンググループを試行

中央図書館では、今年度から学生選書ワーキングを試行することになりました。鳥取地区の3学部から各2名の6名と図書館員で構成しています。選書にあたっては、(1) 授業や研究に必要な図書、(2) 一般教養の習得及び人格形成に必要な基礎的図書、(3) 読みたい図書、友達に薦めたい図書など大学図書館にふさわしい資料、(4) 本学図書館に所蔵されていない図書について留意し、学生の視点から図書の選定を行うことを目的としています。今後は、ブックハンティングの企画、購入図書の展示など行っていく予定です。

インターンシップの受入を行いました。

中央図書館では、9月3日～7日の間、本学地域学部の学生2名をインターンシップとして受入しました。実習内容としてカウンター業務、図書雑誌の受入、書架整理、情報検索、図書の選書等を行いました。

利用者としての図書館と仕事としての図書館の違いに戸惑いながらも、職業人としての態度で実習に取り組んでいました。最後の図書館職員との懇談会では「想像していたより大変だった」「今回の経験を自分の将来に生かしたい」等の意見がありました。

図書館のすすめ —医学図書館長のつぶやき— 公開

医学図書館のホームページに成瀬医学図書館長のページ「図書館のすすめ —医学図書館長のつぶやき—」を公開しました。図書館への思いが綴られています。

次のURLにアクセスして下さい。

<http://lib.med.tottori-u.ac.jp/file10.html>



鳥取大学附属図書館報 第120号 (2012年10月)

【編集・発行】 国立大学法人 鳥取大学附属図書館中央図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地 【TEL】 (0857)31-6728 【FAX】 (0857)28-6346

【E-Mail】tosyokan-m@adm.tottori-u.ac.jp / 【ホームページ】<http://www.lib.tottori-u.ac.jp/>

Copyright (C) 国立大学法人 鳥取大学附属図書館 【本館報について一切の無断転載を禁止します】